

大学生におけるキャリア成熟の形成要因

—共分散構造分析によるモデルの検討—

武蔵大学 経済学部経営学科 4年

伊藤誠悟ゼミナール

松下 航大

要旨 —

現代の日本では、日本型雇用システムの見直しが進む中で、働き手の自律的なキャリア形成が求められている。大学生はキャリア形成の初期段階に位置付けられ、学生時代におけるキャリア準備のあり方を明らかにすることは重要な課題である。以上の背景を踏まえて、本研究は、大学生を対象にキャリア成熟（キャリア・レディネス）の形成要因について明らかにすることを目的とした。

本研究では、Lent & Brown（2013）のCSMモデルに基づき、キャリア・レディネス、キャリア探索、進路に対する自己効力感の関連とそれらの規定要因として、アルバイトにおけるジョブ・クラフティング、親・友人からのソーシャルサポート、大学のキャリア支援センターの利用の影響を検討する仮説モデルを構築した。分析では、共分散構造分析を用いてモデルを検証した。

分析の結果、キャリア探索の環境探索および自己探索、進路に対する自己効力感がキャリア・レディネスを促すこと、親・友人からのソーシャルサポートが進路に対する自己効力感に有意な正の効果が示された。一方で、キャリア支援センターの利用は進路に対する自己効力感に有意な負の効果傾向が見られた($p < .10$)。この結果は、逆因果が考えられ、進路に対して不安を感じている学生ほどキャリア支援を必要としている可能性がある。

また、ジョブ・クラフティングからは自己探索、自己探索から環境探索への有意な正のパスが確認された。この結果から、学生時代のアルバイトにおける自発的な工夫や内省が、自己探索を促進し、それを基盤として企業や職業といった外的環境に興味を持つという探索プロセスがうかがえる。

本研究は、大学生のキャリア成熟の形成を複数要因とプロセスの観点から検討した点に意義がある。しかし、本研究は横断調査であり因果関係の推定には限界があること、サンプルの偏りといった課題が残る。今後は、縦断調査や別の角度や詳細な調査・分析によって、キャリア成熟の形成要因がより明らかになることが期待される。